

基礎看護学習指導案

指導者

1 履修単位数	2 単位
2 実施日時	令和 5 年 10 月 日第 時限
3 学 級	看護科 3 年 (クラス 名)
4 使用教科書	基礎看護 (文部科学省) 基礎看護技術 II (医学書院)
5 単 元 名	救命救急処置技術

6 単元設定の理由

診療に伴う援助においては、患者の苦痛や不安を軽減し、診療が正確かつ円滑に行われるために基礎的な知識と技術を習得した上で、適切に活用できる能力が求められる。看護科 3 年生の生徒は、これまでに基礎看護、人体の構造と機能、疾病について学習している。また、基礎看護実習と成人看護実習では、臨床現場での経験を通して、医療における看護職の専門性や役割について学び、看護の対象への理解や、看護職として対象者に何ができるのか、考えを深めているところである。

わが国では、1993 年に「救急蘇生法の指針」が上梓され、これに準じて市民へ救急蘇生法の教育が行われている。救急蘇生法は、一次救命処置と二次救命処置に大別される。一次救命処置は、患者の心停止の確認、応援要請、一次的な心肺蘇生法をさす。一次救命処置で行われる心肺蘇生法には、非医療職者でも実施可能な、器具を用いない気道確保、胸骨圧迫、人工呼吸、AED (自動体外式除細動器) による除細動がある。総務省消防庁の令和 2 年版「救急・救助の現況」によると、消防本部が実施する応急手当講習受講者数は令和元年には約 196 万人と年々増加傾向にあり、同年の市民救助者による心肺蘇生法実施率は 50.7% まで増加している。心停止傷病者の社会復帰率の向上には、市民救助者による心肺蘇生法の実施と、教育の定着が求められる。

救命救急処置を学習するにあたり、一人の個人として、また看護職として、人の大切な生命を守るために、自分はどのように行動すべきかを生徒に考えさせたい。高校生として、個人に求められる一次救命処置の知識と技術の習得に留まらず、既習の呼吸器・循環器の構造や疾患に関する知識、看護の専門性や役割について学んだことを活用しながら、院外での心肺蘇生法、院内急変を想定した一次救命処置の技術を身に付けるとともに、緊急時における看護職の役割について考えさせたい。

指導にあたっては演習を行い、一人一台タブレットを活用する。演習中の個人の気付きや学びを MetaMoji Classroom の共有シートに入力させ、他者及びクラスで共有する。他者による客観的な視点や多様な気付きを得ながら、自己の技術や態度を振り返り、学びを深めさせたい。

7 単元の目標

- (1) 救急対応の考え方、急変時における初期対応の流れ、トリアージについて理解することができる。
- (2) 初期対応と一次救命処置の技術及びその根拠を理解することができる。
- (3) 事例を用いて、心肺蘇生法が実践できる。
- (4) 院内急変時の対応について理解することができる。
- (5) 止血法について、目的と方法を理解することができる。

8 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技術	知識・理解
救命救急処置技術について関心を持ち、急変者と家族への看護について自ら学び、多様な人々の適切な援助をめざして主体的かつ協働的に取り組もうとしている。	救命救急処置技術について思考を深め、看護の実際について課題を発見し、倫理原則、他職種との連携などの視点を踏まえ、合理的かつ創造的に解決策を見い出している。	初期対応として緊急性が評価でき、心肺蘇生法について、根拠に基づいた技術を身に付けている。	一次救命救急処置と二次救命処置、止血法に関する基礎・基本的な知識を身に付け、看護の役割の役割について理解している。

9 指導計画（8時間）

第1次 初期対応とトリアージの基礎知識・・・2時間

第2次 一次救命処置と二次救命処置の基礎知識・・・2時間

第3次 一次救命処置の実際・・・3時間（本時3/3）

第4次 止血法の基礎知識・・・1時間

	【ねらい】・学習活動	評価の観点				評価規準 評価方法
		関	思	技	知	
第1次	救命救急処置について関心を持ち、初期対応としての緊急性の評価とトリアージについて理解することができる。	●			●	観察 ワークシート 定期考査
第2次	一次救命処置の流れについて理解することができる。 二次救命処置の内容と、使用する物品や薬剤に関する知識を身に付けることができる。	●			●	観察 ワークシート 定期考査
第3次	演習で一次救命処置を実践し、技術を身に付けることができる。 事例を用いて心肺蘇生法を実践し、看護の実際について考察しようとしている。	●	●	●	●	技術評価表 観察 ワークシート 意見交換 定期考査
第4次	止血法の目的と援助の実際について理解することができる。				●	観察 ワークシート 定期考査

10 本時

（1）本時の目標

ア 事例を用いて、チームの一員として心肺蘇生法が実践できる。

イ 実践や観察を通して他者と意見を交換し、より質の高い心肺蘇生法について考察できる。

（2）展開

時間	学習活動	指導上の留意点	学習活動における 具体的評価規準	評価方法
導入 10分	本時の流れと学習の目標を聞く。	本時の流れと学習目標を提示する。		

展開 35 分	○6 名構成の 3 グループに分かれる。 ○提示された事例について、グループで役割を決める。 ○6 名のうち 3 名で、一次救命処置のアルゴリズムに則り、心肺蘇生法（安全確認、初期評価、救急要請、呼吸と脈拍の確認、胸骨圧迫、AED の操作）を実践する。（10 分間）	○演習スペースを 3 ブース設け、各ブースに心肺蘇生練習用人形を 1 体、AED を 1 台準備する。 ○提示する事例は、医療施設外における心原性心停止傷病者の例とする。	一次救命処置のアルゴリズムに則り、チームの一員として自己の役割を果たそうとしているか。 （技術）	観察
	○心肺蘇生法の実践中、観察者 3 名は、観察して気付いたことを水色の付箋で MetaMoJi のワークシートに入力する。 ○心肺蘇生法実施後、実践者 3 名は実践での気づきや困難を振り返り、MetaMoJi のワークシートに水色の付箋で入力する。 ○実践者と観察者で意見や感想を交換する。（5 分間） ○実践者 3 名と観察者 3 名を交代し、同じ事例で心肺蘇生法を実践する。（10 分間）	○MetaMoJi には、「胸骨圧迫と AED の操作」、「チーム連携」の 2 視点の共有シートを配布する。 ○実践で良かった点や、質の高い心肺蘇生法を実践するための工夫や改善点について考えるよう促す。 ○意見交換したことを 2 回目の実践に反映させるよう促す。 ○1 回目の実践に関することは水色の付箋、2 回目の実践に関することはピンク色の付箋で入力させ、1 回目と 2 回目で実践や気づきの変化に気付かせる。	質の高い心肺蘇生法を実践するためにはどうすれば良いか、自己の考えを表現しようとしているか。 （思考・判断・表現） 実践者は観察者から意見を聞き、観察者は意見交換したことを次の実践に生かそうとしているか。 （思考・判断・表現）	観察 ワークシート （MetaMoJi） 観察 ワークシート （MetaMoJi） 観察 意見交換 観察 （MetaMoJi）

	○観察者 3 名は 2 回目の実践を観察して気付いたことをピンク色の付箋で MetaMoJi のワークシートに入力する。 ○2 回目の実践が終了したら、MetaMoJi の共有シートを確認しながら実践を振り返る。	○2 回の実践を通した気付きや工夫したこととその効果等をクラス全体で共有し、質の高い心肺蘇生法を行うためにはどうすればよいか考えさせる。	○より質の高い心肺蘇生法について考察しようとしているか。 (思考・判断・表現)	観察 ワークシート (MetaMoJi) 観察
まとめ 5 分	本時のまとめを行う。	○救急の連鎖をつなぐためには、確かな知識や技術、チームの連携が必要であることを伝える。 ○日頃から、自分が救助者になるかもしれないという心構えや、救急処置に関する確かな知識と技術を習得しておくこと、緊急時のコミュニケーションが、人命を守ることに繋がることを伝える。		観察

(3) 評価及び指導の例

「十分満足できる」と判断される状況	チームの一員として、他者とコミュニケーションをとりながら心肺蘇生法の演習や意見交換に取り組もうとしている。 自己の実践及び他者の実践を通して得た気付きや学びを、言語化して表現しようとしている。
「おおむね満足される」状況を実現するための具体的な指導	演習で生徒の役割分担を明確に伝え、より質の高い心肺蘇生法を行うためにはどのように協働するとよいか考えるよう指導する。 気付きや学びには多様な視点や考え方があり、他者の気付きや学びを自己の実践に生かせるよう指導する。